

2020 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	清田 政秋
研究テーマ	本居宣長の言語観・歴史観に関する研究
研究概要	本居宣長の学問の基礎にある仏教から影響を受けた言語観とそれに密接に関連する歴史観を究明するため、第一に宣長と江戸期仏教との関連を明らかにし、第二に宣長研究の枠組みを作った明治の先行研究の再検討を通して、宣長の言語観・歴史観を西洋の文献学及び言語思想と比較し、その特質を考察する。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>本居宣長は反仏教の人という通説に反し、青少年期に基礎的仏教教養を身に付け、生涯仏教を学び続けた。宣長の学問の基礎には心と事と言語は一体とする言語観があり、それは仏教からの影響である。江戸期は仏教が普及し仏書が広く流通した。その仏書流通は宣長の仏教教養に現れている。2020 年度は宣長の初期著作に載る約 850 の仏書の抽出と整理、及び成人期以降の仏書講読の調査を行い、宣長の仏教教養と言語観との繋がりを調査し考察した。</p> <p>次に宣長研究の枠組みを決めた明治期の村岡典嗣の宣長研究の問題点を、村岡が依拠したドイツ文献学の著作に遡って検討し、それを通して宣長の上代理解の方法を考察した。宣長は自らの言語観に基づき、古伝説は事実であるとして、上代の「人のありさま心ばへ」を言語のさまの究明によって明らかにしようとした。2020 年度は宣長の方法は、上代人の経験は事実であったことを上代人の心の外から語るのではなく、上代人の経験を自らの心の中で追体験し、それにより古伝説の事実性を上代人の心の内面から捉えてその「心ばへ」を理解するものであったことを確認した。</p>
2. 今後の課題	<p>宣長の初期著作に載る約 850 の仏書を分析してその基礎的仏教教養の性格を明らかにするとともに、京都遊学時代における勉学状況を調査して、宣長は仏教の特質を儒学との比較においてどのように把握したかを検討する。京都時代の宣長の勉学は、医者になるための勉強とその基礎学としての漢学・儒学の学習であり、仏教学習についてはほとんど直接証拠を残していない。しかし当時の仏教学習の適地であった京都にあって仏教に無関心であったはずはなく、宣長が漢学勉強の傍らで仏教をどう学んだかを、研究ノート・日記・手紙・和歌等様々な文献によって調査する。</p>